

会報ふれあい

No.71

令和6年8月1日

発行・編集 青少年育成牛久市民会議

事務局 生涯学習課 TEL.873-2111

願わくば屋根より高い鯉のぼり

真つ青な空の下、第35回うしく・鯉まつりは 会場を近隣公園に戻し、盛大に開催されました

会長 田井 鉄男

真つ青な青空の下、今年のように、鯉まつりは、会場を元の市役所西の近隣公園に戻して、盛大に開催されました。池の上で鯉のぼりが小ぶりながらも楽しそうに泳いでいる姿が観られました。

開会セレモニーの童謡では、屋根より高い鯉のぼりと唄われてい

ます。実際には、鯉のぼりを見た時にふと気が付いたのですが、今年の鯉のぼりは残念ながら屋根より高くない鯉のぼりが多かった印象でした。大空を舞う屋根より高いこいのぼりを見たいのは、皆さんも同感ではないでしょうか。

私もバルーン作りを少しお手伝いさせていただきましたが、スタッフは休みをとれないぐらいの忙しさでした。スタッフの皆様は疲れや休みをとれなくても、子供たちの笑顔に癒され、来場者の方々に楽しんでいただくために、皆様一生懸命頑張っている姿に心を打たれました。



会場を元に戻して規模の大きさが改めて目立ちました

去年、うしく・鯉まつりは初め

今年も元々の会場に戻り、木陰に敷物を敷いたり、テントを張ったりして、涼を取りながらイベントに参加し、ゆつくりと鯉のぼりを眺め寛ぐ家族連れも多くみられました。

幼稚園、保育園の子どもたちによるパネルの力作もフェンスに飾ることが出来、主役の子どもたちはお父さん、お母さん、おじいちゃん、そして、おばあちゃんに自分の作品を自慢げに説明し、写真を撮ってもらっている姿は、なんとも微笑ましい光景でした。



イベント会場はどこも大盛況で、

大規模・多様で奥行きも深く 鯉まつり、元の会場で盛大に開催

翻る鯉のぼりの美しさ

市長挨拶で想起

会場を牛久シャトーから元の近隣公園に戻した第35回うしく・鯉まつりは、青少年育成牛久市民会議田井鉄男会長の「皆さん、見事な快晴です」という第一声で始まりました。みんなが見上げた空は、全く雲がなく何処を見ても真っ青な空で、この日の鯉まつりの成功を最初から手放しで祝ってくれているようでした。

「次に、沼田市長が挨拶に立ちました。市長は「私たちが子どもたちは牛久でも5月になると、あちこちの家の庭に、鯉のぼりが高く翻った。鯉まつりは、子ども思いに出に残る、子どもが郷土に愛着を持つ手掛かりとなるイベントであって欲しい」と力説しました。

この挨拶を聞いた老高齢者の中には、20年ほど前、カナダの姉妹都市ホワイトホースから牛久にやって来たホームステイの客を県北の太子町に連れて行ったとき、木々の緑が輝く山村集落に翻る鯉のぼりを見たカナダ人の客が「これこそ日本の美しさだ」と、ものすごく感激した話を周りに披露している人もいました。

魅力的だった

子どもたちのフラダンス

開会セレモニーが終わると、参加者は一斉に自分のお目当てのブースに散って行きました。ステージでは子どもたちの2つのグループの踊りが始まりました。最初は「おくの土曜カッパ塾」に7年前に誕生したダンスグループで、総員13人の小学生のうち8人が出演していました。中に男の子も1人いました。もう一つは荃崎のフラダンス教



これが初舞台のおくの土曜カッパ塾ダンスグループ



子どもでも十分にフラダンスの雰囲気が出ていました

室「ケオラオカアイナ」に通っている3歳から中学3年生までの30人。全員フラダンスの衣装を身に着け、しつかりお化粧もしていました。フラダンスの基本が身につけている子どもたちの動きは極めて魅力的で、池の周りの観客は踊りが続く間、殆どそこを動かさずじまわりました。

広い会場で一気に挽回した

エアーフishingの人気

かつて一番人気を誇った魚のつかみ取りはなくなり、今年は代わりのエアーフishingが一気に人気を挽回しました。釣り場を元の場所



開放的な会場設定で一気に人気挽回したエアーフishing

に戻したことで雰囲気が一変したのです。池には水がなく、カラーで描かれた切り抜き魚は、芝生の丘の上に並べられました。人間は全員が水のない池の側に立って、丘の上の魚を釣るのです。この開放的な設定が大きな効果を発揮しました。

家族の幸せにピント合わせる 父親カメラマン

「完璧な晴天の下に十分な面積をとって数多く並べられた魚。それを、一定の間隔をとって大勢並んだ子どもたちが、係の人の合図で一斉に釣り始めると、子どもたちの素直かつ真剣なエネルギーで、辺りの空気が一瞬引き締まったように感じられました。本物の魚のつかみ取りと違って、並べられた魚の種類がものすごく多かつたことも、参加者の知識欲を刺激しました。父親が子どもの脇に張り付いて、子どもが釣ろうとする魚を1つ1つ「それは鯛だ」「それは鯉だ」と解説する姿も見られました。」



3方向から投げるようにしたテーブルカーリング

「幼児を的の前に座らせ、母親が投げ方を教える。それをカメラに



紙コップ2つを輪ゴムでつなぎ空飛ぶ紙コップ成功

昨年中止された竹ポックリレースは、安全のために竹ポックリの高さを例年より少し低く統一して復活しました。おじいさんと一緒に来たという幼児は、昨年は人数制限で出



子どもたちにお手玉をしてみせるおばあちゃん

読み聞かせのブースでは、2人の小学校中学年ぐらいの子どもが、

**単語一つで語られる物語
読み聞かせ、驚異の演技力**

その演技から、本に初めて接す

取めようとあれこれアングルを工夫する父親。周りには「もしかすると、この家族の幸せのものすごく貴重な一瞬が切り取られているかもしれない」と考えた人もいました。

テーパーカーリングは、今年は3方向から投げられるようになりました。1人で最低3回投げられるだけでなく、投げる角度に工夫の余地が広がったことで楽しさも増しているようでした。

**キヤタピラーレース
距離倍増で子どもの元気爆発**

声を出すわけではありませんが、子どもたちはとても活気に満ちていました。これまでは決勝ラインに到達すればレースは終了でしたが、今年は決勝ラインに到達したらそこから引き返しスタートラインまで往復して終了というルールになりました。距離が倍になって、子どもたちも元気をさらにギアアップしたのです。

係の人の話では、従来の片道レースでは、子どもたちが決勝ラインに着いたら、段ボールのキヤタピラーを係の人たちがスタートラインまで運び返さなければならなかった。これが人手不足で大変だったので、子どもたちに運び返して貰うために往復レースにしたとのこと。結果良ければ全てよし。さらに活気が出てみんなが納得したキヤタピラーレースの係員不足対策でした。

おじいさんは「空きカンポックリより竹ポックリの方がずっと良い」と力説していました。竹ポックリと空きカンポックリの良さの違いをはっきり指摘するおじいさんの感覚の確かさに、周りの人も頼もしさを感じていたようでした。

**昔の遊びの指導者
地域人材発掘が必要の声も**

子どもも大人も大体2、3回の指導で出来るようになる人が多いように見えました。お手玉では、家族と一緒に来たおばあちゃんが孫に教える姿も見られました。

昔の遊びを指導する地域人材発掘の必要性を説く人もいました。牛久市の小学校では1年生の課外授業で「昔の遊びに挑戦」させている学校もありますが、指導しているのは地域住民の中の「名人さん」たちです。その名人さん台帳に載っている名前が、高齢化で毎年どんどん減っていくので、青少年育成市民会議と学校運営協議会が手を結んで、地域に埋もれている牛久の名人さんを発掘し、学校と鯉まつりの両方で活躍して貰うべきだという主張でした。



子どもたちを強く引きつけた読み聞かせの表現力

この紙芝居は、生まれて初めて絵本に接する幼児を対象とする、いわゆるブックスタートの作品でした。その如何にも幼児向けの紙芝居に、かなり高学年の小学生が引き込まれる理由は、周りの大人たちにも直ぐに分かりました。

物体がどんな風に転がっているのか、いろいろに変化する転がり方の違いを、読み聞かせボランティアが「ころころ」という単語の言い回し方を変えるだけで、実に見事に表現し分けていました。その優れた「演技」と言った方が良いでしょう。その演技から、本に初めて接す



自分たちで制作したパネルの前で家族と一緒に

る幼児もかなり年長の子どもも、受け取るべきものを逃さず受け取る。優れた読み聞かせには、そういう力があることを改めて気づかせてくれた、読み聞かせの奥深い威力でした。

パネルでつながる

園児と母親と保育士たち

幼保育園児の描いたパネルが飾られた北側の段丘の上は、混んでいるという訳ではありませんが、常に何人かが子どもたちの作品に見入っていました。1番目立ったのは、やはり描いた本人でした。家族と一緒に来て、自分の作品の前で写真を撮って貰う光景がいくつも見られました。



消防車の前で防火服着用体験

してニッコリ。隣では保育士2人も一緒に見守っており、そのうちママ友も集まって来ました。子どもたちが自分たちのつながりを表現するためにみんなで作ったパネル。それが鯉まつりに飾られることで、今度はお母さん同士あるいはお母さんと幼保育園のつながりがさらに育っていく。そんな進展が垣間見えるような光景でした。

今さらながら見えてきた

鯉まつりの奥行きの深さ

鯉まつりは全体が非常に大きな出合いの場になっています。子どもと両親や祖父母が一緒に来ている家族は、遊びを楽しむ一方で、それ以上に家族が一緒に同じ時間を過ごせる幸せを噛みしめているようです。

最初から申し合わせて一緒に来た子どもたち。1人で来たけれど

1つ1つの遊びはそれほど大掛かりなものではないけれど、種類が多いので大規模に見える。そういう多様な遊びの1つ1つを見ると、単に体を動かすだけでなく感覚や想像力を最大限に働かせることでより豊かに楽しめる遊びも多い。鯉まつりの大規模さには、そういう奥行きも深さもあることに今さらながら気づいた広報部会員もいた第35回らしく、鯉まつりでした。



露店もこんなに賑わっていました

会場で友だちと出合いグループで動いている子どもたち。どちらも友だちと一緒にだから一層生き生きする。鯉まつりはそういう場所のようです。

鯉まつりはリピーターが非常に多い中で、「今回が初めてだ」という人も毎年見かけます。最近牛久に引っ越してきて今回初めて鯉まつりに来たという人は、鯉まつりの規模の大きさにビックリしていました。

親子ふれあい教室

全部で150人が参加 抽選で落ちる人も

昨年度の親子ふれあい教室は12月10日に、そばづくり・やきものづくり・消しゴムはんこ・宝石せっけんづくり・パンづくりの各教室が開かれました。

やきものづくりは定員60人、他の教室は親子10組、合計150人が中央生涯学習センターと奥野生涯学習センターの各会場に分かれて、それぞれのものでづくりに取り組みました。

親子ふれあい教室は人気があつて応募者が多いため、今回も抽選で漏れた人がたくさんいました。特にそばとパンが高い競争率でした。

そばづくり教室の父子は「2人ともそばが好きで、家で自分たちで作って食べてみたいので参加した」とのこと、極めて熱心且つ



競争率が高かったそばづくり

鯉まつりがフィナーレを迎えた時、この1日、空高く翻る鯉のぼりがないことを嘆いたり愚痴ったりする青少年育成市民会議の人に、1人も出会わなかったことに気づきました。来場者に鯉まつりを最大限楽しんで頂くという時に、愚痴や嘆きでそれに水を差すようなことは控える。市民会議の方々のそういう節度の高さを思うにつけ、皆さんが、鯉まつりの象徴として、高く翻る鯉のぼりをどれだけ望んでいたか——強く感じないではいられませんでした。

編集後記

焼きものづくりでは、父子でも母子でも、それぞれ自分たちの作りたいものを作り、親子が互いに相手のやり方や発想を取り入れようとするような雰囲気がかくなく、印象的でした。



お母さんと一緒にパンづくり